

「ニュートンの法則」の発想を生んだといわれるリンゴの木の子孫が、新発田市富塚町の敬和学園大学（北垣宗治学長）のキャンパスで、実をつけて学生たちの人気を集めている＝写真。

イギリスの物理学者、アイザック・ニュートンがリンゴの実の落ちるのをみて「万有引力の法則」の着想を得たというリンゴの木は、ウルスソープの生家に残されており日本にも昭和39年東京・小石川植物園に贈られ、全国に分けられている。

同大学では、平成3年4月の開学にあたって「国際化時代に向けて世界をリードする人材が育って欲しい」という願いを込め、秋田県果樹試験場から苗

新発田・敬和学園 ゆかりのリンゴの木に実

を分けてもらい植樹した。

植えてから6年目を迎えた今年、初めて十数個の実が鈴なり状態になった。台風8号の強風で堂々と引力を証明したものもあるが、6個が直径3—5センチに生育している。

西村秀雄助教授は、「原生種に近いので、重さは普通のリンゴの250グラムにはならないが、約100グラムと力の単位になる1ニュートン（102グラム）と同じぐらいになろう」と見込む。

リンゴは自家授粉せずに、近くの北蒲・聖籠町産のリンゴからの花粉で結実しているため、同助教授は「国際交流の手本にもなります」と胸を張っている。

